

高齢者の学習動機と主観的幸福感に関する研究

—高齢者大学への参加動機と主観的幸福感の関係—

高橋一公（東京未来大学モチベーション行動科学部）

本研究は、高齢者大学にて継続的に学習を実践している高齢者を対象に、生涯学習の参加動機と主観的幸福度および現在の自己効力感に関する調査項目を作成し調査・分析を行った。この16項目の回答の類似性を用いて、高齢者の学習動機からクラスター分析を行い、このクラスターを基に主観的幸福感ならびに自己効力感について検討を行った。分析の結果、3つのクラスターが抽出され、第1クラスターは二次利得として「参加することの魅力」が強く、第2クラスターは「参加することの魅力」が低い特徴を持つ。そして第3クラスターはそのいずれも高い特徴を持つ。PGCモラル・スケールによる主観的満足感得点は第3、1、2クラスター順で高く、分散分析の結果、有意差が見られた。したがって高齢者の高齢者大学への学習動機は、「学ぶこと」と「参加すること」（二次的利得）にまとめられる。この2つの動機がいずれも高い高齢者は「主観的幸福感」が高い傾向があることが示された。

キーワード：高齢者、学習意欲、主観的幸福感、自己効力感

問 題

はじめに

超高齢社会における社会参加、社会的活動、社会的役割、社会的統合は老後の適応や健康、ウェルビーイングと関連があることが老年学のなかで論じられてきた（たとえば、堀 2012, 小田 1993）。また、サクセスフル・エイジングやプロダクティブ・エイジングの概念の中にも社会的貢献や社会的生産性による主観的幸福感の向上に関わる効果が期待されている。

このような背景の中で高齢者人口の増加する現代において、老年期において積極的に学習活動を行っている、あるいは学習活動を希望する高齢者の数は増加傾向にあるといつてよい。この積極的な学習活動を支えている要因として、単なる学習意欲だけではなくプロダクティブな活動を支えられとされる主観的幸福感や自己効力感がどのように影響しているのかは興味深い。

日本の生涯学習の変遷

日本における高齢者の学習活動は欧米における職業訓練的な位置づけとは異なり、人間形成や余暇のための活動という位置づけにより生涯学習という名称のもとに行われている。

高齢者を対象とした生涯学習プログラムは当初、旧文部省が市町村を対象に「高齢者教室」を1965年にスタートさせ、その後名称を「高齢者学級」に変更して行われた。また、旧厚生省による「老人大学」は高齢者の生きがいづくりの観点から市町村に開設さ

れた。1986年には長寿社会対策大綱が閣議決定され、その後旧文部省によって「長寿学園」が都道府県を対象に補助事業として開始されたが、バブル経済崩壊の影響により補助金の全廃により事業として継続されるところは大幅に減っていくことになる。

瀬沼(2010)は、補助金に頼らざるを得ない高齢者向けの高齢者学級事業は1994年の補助金の全廃以降伸びていないことを指摘し、自治体間の格差が広がっていると述べている。さらに瀬沼は、近年では自治体中心のプログラムだけではなく大学の公開講座や民間のカルチャーセンターなどのプログラムが台頭しその中心的な役割を担っていることを示すとともに、高齢者の学習ニーズの変化に伴い、これまでの習い事、お稽古の場としてのインプット型のプログラムから、学んだ内容を成果として外に向けて発信するプロダクティブなアウトプット型のプログラムが重視されるようになってきていることを指摘している。

高齢者教育の定義と理論

1970年代初頭、老年学の下位分野のひとつとして教育老年学が萌芽している。これは社会老年学と生涯学習論との合流によるものである。MaClusky(1971)は高齢者教育を「ポジティブな結果を生み出す前進的な活動」ととらえ、高齢者教育のマージ理論(theory of margin)と「高齢者の教育的ニーズ」論の2つを提唱している。

Peterson(1976)は教育老年学を「高齢者および年をとるにつつある人びとのための、あるいは、彼らについての、教育的作用の研究・実践を意味する」

と定義している。そして、教育老年学の研究・実践領域として、「高齢者に対する教育(education for older people)」「エイジングと高齢者に関する教育(education about aging)」「高齢者にかかわる専門職員への教育的準備(education of professionals and paraprofessionals)」という視点をあげている。

堀(2000)はエイジングと教育に関する問題をエイジング教育の「基礎科学」と「実践論」とに分けている。「基礎科学」の部分には、「エイジング・プロセスの研究」「エイジングと学習能力・学習行動との関連の研究」「高齢者の学習の成立条件の研究」の3つの柱を置いている。また、「実践論」は、「高齢者の特性を活かした学習援助論」「一般市民に対するエイジング教育」「高齢者に関わる専門職員へのエイジング教育」「学校教育におけるエイジング教育」の4つの柱を掲げている。

高齢者の学習意図

浅野(2006)は65歳以上の放送大学学生において、多様に思考する楽しさが生涯学習参加への積極性と持続性に影響していることを示している。しかし、高齢者の「多様思考の楽しさ」が影響を及ぼす生涯学習の側面は教育年数によって異なっており、高等教育修了者では持続性に影響し、初等・中等教育修了者で

は積極性に影響していることを導いている。さらに65歳以上の学生に対する面接調査から、高等教育修了者の「多様思考の楽しさ」は多分野の学問を次々に関連づけ、興味が広がる「拡大的多様思考の楽しさ」であり、これが持続性につながるとしている。また、初等・中等教育修了者の「多様思考の楽しさ」は、ある課題に対して異なる視点を獲得し理解を深める「深化的多様思考の楽しさ」であるために積極性につながるとしている。

現実の高齢者の社会参加に関して、内閣府の「平成29年度版高齢社会白書」(2017)によれば、60歳以上の高齢者の61.0%は何らかのグループ活動に参加したことがあり、1993年に比べると18.7ポイント増加していることが示されている。自主的なグループ活動に参加したことがある高齢者が活動全体を通じて参加してよかったことは、「新しい友人を得ることができた」(48.8%)が最も多く、次いで「生活に充実感ができた」(46.0%)、「健康や体力に自信がついた」(44.4%)の順となっている。また、高齢者の生涯学習への参加状況についてみると、この1年間に生涯学習をしたことのある人は、60代でも70歳以上でも4割以上となっている。内容は、「趣味的なもの」が最も多く、60代で24.6%、70歳以上で24.9%となっている(Figure 1)。

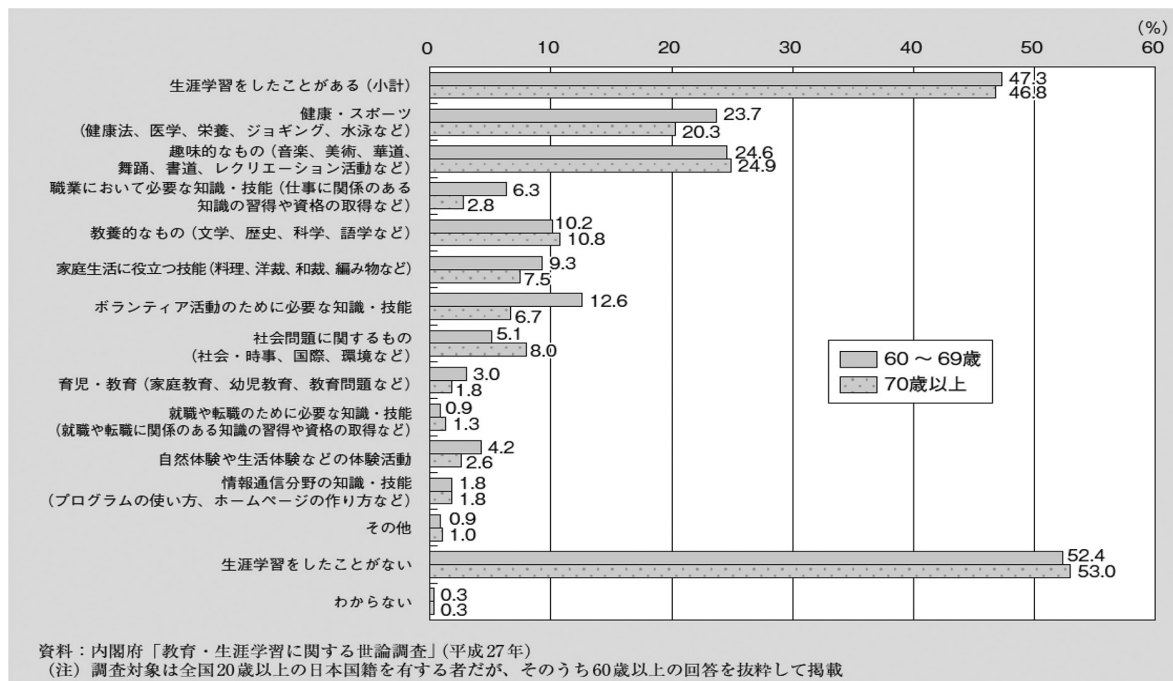


Figure1 高齢者が行っている生涯学習 (内閣府 2017)

主観的幸福感

サクセスフル・エイジングの研究においてその指標の一つとして主観的幸福感(subjective well-being)という概念が用いられている。Larson(1978)は自記式尺度によって測定される幸福な老いの程度の総称としてsubjective well-beingを提唱し、それが日本において「主観的幸福感」と訳されたことによって、この領域での研究を前進させる貢献をしている。そして、下仲(1997)は主観的幸福感を「高齢者が自らの人生や生活に抱いている主観的な充足感」と定義している。

この主観的幸福感の代表的な測定尺度としてPGCモラール・スケール(Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)がある。Lawton(1975)はモラールの概念について検討し、「モラールが高い」ということは、「自分自身についての基本的な満足感を持っていること」「環境の中に自分の居場所があるという感じをもっていること」「動かしえないような事実については、それを受容できていること」という3つの意味が含まれているとしている。その後、下位概念を「心理的動揺」「不満足感・孤独」「老いに対する態度」として17項目からなるスケールに改訂されている。

高齢者の学習行動と主観的幸福感

百瀬ら(2013)は、シニア大学に参加している地域在住の高齢者の主観的幸福感について身体的側面、社会的側面、対人交流面から検討している。その結果、高齢者の主観的幸福感に影響する生活状況では、自律した生活ができ、友人との良好な交流が交わされていることであり、自分のやりたいことで自己実現を図ることが生活上の満足感を高め主観的幸福感を向上させるとしている。

また、竹内ら(2011)は看護の側面から、地域高齢者の主観的幸福感に関連する社会活動要因を明らかにし、地域高齢者に応じた社会活動を高める支援の在り方を検討している。その結果、主観的幸福感と関連していた項目は、家族構成、主観的健康感、社会活動の中の個人活動であり、地域高齢者のQOL向上には、健康維持活動と共に、地域特性を踏まえた身近な個人活動レベルの社会活動支援が有効であることを導いている。

しかし、学習行動への参加動機という視点から主観的幸福感との関係についてアプローチしたもので

はなく、高齢期の社会的活動というアウトラインからの視点が中心となっている。近年の高齢者を取り巻く状況を勘案するならば、高齢者大学などに自ら参加するプロダクティブな活動を行う高齢者が何を求めているかについて検討することは、これからの高齢社会における主観的幸福感について何らかの示唆をもたらすものと考えられる。

高齢者と自己効力感

自己効力感(Self-Efficacy)とは、社会的学習理論あるいは社会的認知理論の中核をなす概念の1つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指している。

高齢者の自己効力感に関する研究は介護や福祉領域での研究が多い。例えば、畑野ら(2006)は認知症高齢者の自己効力感の向上によって環境変化に遭遇しても意思表示の促進につながることを示している。また、山崎ら(2010)の閉じこもり予防・支援の観点から自己効力感尺度の開発を目的とした研究では、外出頻度が高いほど自己効力感が高いことを導いている。

しかし、学習行動と自己効力感との関係についての研究は決して多いとはいえず、むしろ不十分であるといつてよい。小柳(2012)は学習行動だけではないが、在宅高齢者の社会参加と自己効力感に関係について検討している。その結果、社会参加活動(「仕事」「個人活動」「社会・奉仕活動」「学習活動」)は、自己効力感に対して有意な影響を与えることを明らかにしている。その他、「自己効力感」という表現を用いて学習行動との関連を示した研究は見られるが、客観的な指標を用いたものではない。このようなことから学習行動と自己効力感の関連についての検討はこの領域でのひとつの課題と考えられる。

目 的

今回の研究では高齢者大学にて継続的に学習を実践している高齢者を対象に、高齢者大学への参加動機と主観的幸福感および現在の自己効力感の関係を明らかにすることを目的とし、調査・分析を行った。

方 法

対 象

1年制あるいは2年制高齢者大学にて継続的な学習を行い、かつ有効な回答が得られた高齢者109名（男性62名 女性47名）。平均年齢68.03歳、SD3.91歳。

調査方法および倫理的配慮

倫理的配慮

配票調査方式で実施。

調査は無記名で行い、研究の趣旨、調査の協力に関しては個人の自由であり、協力できない者は回答せずによりことや途中でやめても不利益を被らないこと、回答で得られたデータは統計的処理を行い、本研究の目的以外では使用せず、研究後は速やかにデータを破棄することを依頼書と調査用紙にて説明し、同意を頂いたうえで回答を求めた。

調査項目

調査項目は学習歴や世帯構成などの基本的属性と堀ら（2012）が聞いた学習参加動機に関する質問、およびLawtonの改訂版PGCモラル・スケール、Shererらの特性的自己効力感尺度邦訳版（成田ら、1995）を用いて個別に回答を求めた。

回収は、各自投函していただくことを依頼し、郵便にて行った。

結 果

対象者の属性

今回の高齢者大学に通う調査協力者の特性は、以下の通りであった。

学歴

無回答のものを除き、約96%が高等学校卒業以上の学歴を有していた。そのうち、短期大学、高等専門学校、大学の学歴を有する者は39%であった。

仕事の有無

「常勤」あるいは「パートタイム」にて現在も仕事を続けている者は約20%、専業主婦として家事に専従しているものは約21%であった。現在仕事をしていないと回答したものは約53%であった。

世帯構成

「単身」ならびに「夫婦のみの世帯」と回答した者

が62%であり、孫と同居している拡大家族は4.7%にすぎなかった。

世帯人数

世帯人数に関しても2名までと回答した者が約71%であり、そのうち約11%が単身世帯と回答している。4名以上の世帯人数を有する者は5%にすぎなかった。

学習歴

高齢者大学にての学習歴については約69%のものが1年6か月以上継続していると回答している。2年以上と回答した者は約44%であった。

高齢者大学へ参加動機

高齢者大学に通うようになった理由について回答を求めた結果、table 1の通りであった。「仲間の輪を広げたいから」「余暇を有効に使いたいから」「これからの生活を豊かにしたいと考えたから」のどの項目に対する回答が多かった。

table 1 高齢者大学へ通うようになった理由

項 目	度数	相対度数
1 学習内容に興味があるから	59	54.1%
2 健康維持のため	41	37.6%
3 講師が魅力的であるから	5	4.6%
4 参加費が安いから	14	12.8%
5 自宅から近いから	21	19.3%
6 余暇を有効に使いたいから	62	56.9%
7 退職して時間的余裕ができたから	47	43.1%
8 これまでの学習を続けたかったから	4	3.7%
9 仲間の輪を広げたいから	66	60.6%
10 趣味を身につけるため	17	15.6%
11 学習内容を地域活動などに活かしたから	30	27.5%
12 ほかに人がみんな行くので	1	0.9%
13 仲間や友人にさそわれて	11	10.1%
14 家族にすすめられて	5	4.6%
15 これからの生活を豊かにしたいと考えたから	58	53.2%
16 なんとなく	1	0.9%

この16項目の回答の類似性を用いて、高齢者の学習動機からクラスター分析を行い、このクラスターを基に主観的幸福感ならびに特性的自己効力感について検討を行った。

分析の結果、3つのクラスターを抽出され(Figure 2)、さらクラスターを判別している要因を特定するために判別分析を行い、その特徴の考察を行った。判別に影響している「参加することの魅力」（二次的利得）と「学ぶことから得られる魅力」（学ぶこと）という2つの関数が示された(table 2)。

第1クラスターは「参加することの魅力」が強く「学ぶことから得られる魅力」が低い特徴を持ち、第2クラスターは「学ぶことから得られる魅力」は中庸で「参加することの魅力」が低い特徴を持つことが示

された。さらに、第3クラスターは「参加することの魅力」と「学ぶことから得られる魅力」のいずれも高い特徴を持つことが示された。

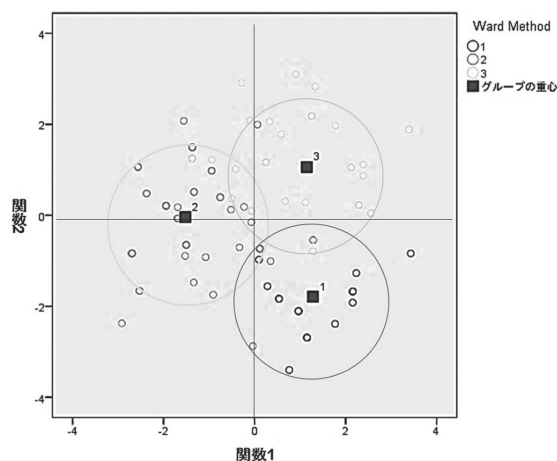


Figure 2 クラスターの分布

項目	1	2
学習内容に興味があるから	0.48120	0.36930
健康維持のため	0.40679	-0.76667
講師が魅力的であるから	-0.29115	-0.30957
余暇を有効に使いたいから	0.54201	0.08474
退職して時間的余裕ができたから	0.44408	0.44837
仲間の輪を広げたいから	0.69277	-0.03567
趣味を身につけるため	0.42359	0.27824
これからの生活を豊かにしたいと考えたから	-0.41193	0.53470

クラスター毎のPGCモラル・スケール、特性的自己効力感尺度

クラスター毎のPGCモラル・スケールとその下位尺度の平均と標準偏差はtable 3の通りである。

PGCモラル・スケールによる主観的満足感得点は第3、1、2クラスターの順で高く、分散分析の結果、有意差が見られた ($F(2,106)=3.34, p<0.039$)。また多重比較の結果第2クラスターと第3クラスター間に有意差が見られた。

	度数	PGC全体		心理的動揺		孤独感及び不安感		老いに対する態度	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
第1クラスター	22	12.82	4.20	4.27	1.88	4.91	1.44	3.64	1.36
第2クラスター	48	12.02	4.24	4.17	1.87	4.44	1.72	3.42	1.49
第3クラスター	39	14.08	2.46	4.59	1.48	5.31	0.86	4.18	0.94
合計	109	12.92	3.77	4.34	1.74	4.84	1.45	3.73	1.32

PGCモラル・スケールの下位尺度の「心理的動揺」「孤独感及び不安感」「老いに対する態度」については、「孤独感及び不安感」と「老いに対する態度」でクラスター間に有意差が見られた ($F(2,106)=4.10,$

$p<0.019 F(2,106)=3.84, p<0.025$)。いずれも多重比較の結果、第2クラスターと第3クラスターの間には有意差が見られた。

特性的自己効力感尺度得点においては、有意差は見られなかった(table 4)。

table 4 各クラスターの自己効力尺度平均値

	度数	自己効力尺度	
		平均	SD
第1クラスター	22	79.182	14.631
第2クラスター	48	77.625	14.043
第3クラスター	39	78.744	10.843
全体	109	78.339	13.009

考 察

対象者の属性から

今回は高齢者大学へ通学が可能な健康な高齢者を対象に調査を行ったが、その属性から現代における高齢社会の課題を垣間見るようになった。

調査を行ったのは東京のベッタタウンでありながらも歴史を感じさせる中核都市に設置された高齢者大学であり、周囲には自然を感じさせる緑豊かな環境が残されている地域でもある。

学歴に関しては戦後の学校制度で学んだ人たちが中心であり、約96%が高等学校卒業以上の学歴を有していることが示されている。高等教育修了者も約4割と学習に対する構えは十分であることが予測される。

このような状況にあって、特徴的であったのが家族構成と世帯人数である。「単身」あるいは「夫婦世帯」と回答した者が6割を超え、さらに世帯人数においても7割以上が2名までと回答している。内閣府(2017)の平成29年版高齢書白書では65歳以上の単身世帯ならびに夫婦のみの世帯は全体の56.9%であり、これをみても高齢者大学に通う高齢者の世帯規模が小さいことがうかがえる。

今回の調査協力者の属性から、健康で学歴が高く世帯人数が少ないという背景を持つ高齢者が高齢者大学へ参加していると考えられる。

高齢者大学への参加動機とその特徴

参加動機から

参加動機として多かったのは、

- 「仲間の輪を広げたいから」
- 「余暇を有効に使いたいから」
- 「これからの生活を豊かにしたいと考えたから」
- 「学習内容に興味があるから」

などである。

高齢者の場合、「知識の獲得」への期待よりも対人関係の拡大や余暇への期待が高齢者大学での学習動機になっていることが示されている。それに対して、「講師への魅力」や「受講料」「自宅からの近さ」などは学習動機としてはあまり強くないことも示された。

また、「学習内容を地域活動などに活かしたいから」や「健康維持のため」などを選択する高齢者も少なくないことを加味すれば、学んだことを何らかの形で発信することを求めていることもうかがえる。

クラスター分析から

結果で述べた通り、高齢者大学に通うようになった理由の回答パターンの類似性を用いてクラスター分析を行った結果、3つのクラスターが抽出され、その判別関数として「参加することの魅力」（二次的利得）と「学ぶことから得られる魅力」（学ぶこと）が求められた。「参加することの魅力」では、「知識の獲得」「時間の有効利用」「対人関係の拡大」「健康の維持」などが寄与している。「学ぶことから得られる魅力」では、「精神的豊かさへの希求」「時間的余裕」が寄与、反面「健康維持」は寄与していないことが示されている。

高齢者大学に通うようになった理由、すなわち目的からクラスターの特徴を記述すれば、「参加することの魅力」を主とする第1クラスター、「なんとなく」学ぶことを主とする第2クラスター、「参加することの魅力」と「学ぶことから得られる魅力」がともに高い第3クラスターと表現することができる。

このことから高齢者大学に求めるものも異なることが予想され、第3クラスターは学んだものを何らかの形で発信するアウトプット型の生涯学習を期待する可能性があるのに対して、第2クラスターの場合は知識を中心としたインプット型の学習を期待する可能性を示唆している。第1クラスターは社交の場としての学習機会を期待している可能性が強いと考えられる。

主観的幸福度（PGCモラル・スケール）について

PGCモラル・スケールの全体平均得点は12.92 (SD=3.77)で、健康な高齢者の場合、PGCモラル・スケールの平均値は11点～12点といわれており、一般的な高齢者の得点よりも高く、特に第3クラスターに属する高齢者の平均値は14.08点(満点17点)であり高齢者大学に通う高齢者の主観的幸福感が高いといえる。

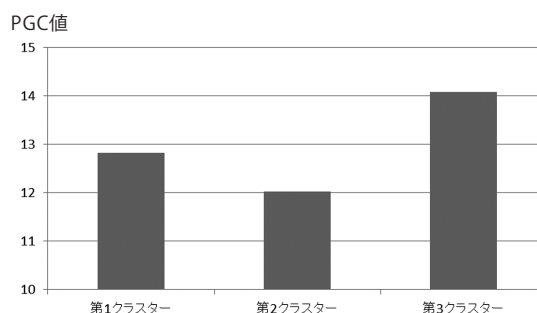


Figure 3 PGCモラル・スケールのクラスター毎の平均

このような中で、第2クラスターと第3クラスター間に有意差が見られた。特に「参加することの魅力」と「学ぶことから得られる魅力」が高い特徴を持つ第3クラスターの得点が高く、学習への目的意識や参加への動機づけが主観的幸福感と関係していると考えられる。逆に「参加への魅力」（コミュニティとしての位置づけ）が低い第2クラスターは他のクラスターと比較して主観的幸福感が低いことが示された (Figure 3)。

このことから自発的な学習が可能で通学可能である健康状態を持つこと、対人関係や余暇の有効利用を積極的に学習活動に求める傾向が高齢期の主観的幸福感に影響を与える可能性が示唆された。

PGCモラル・スケールの下位尺度である「孤独感及び不安感」と「老いに対する態度」においても第2クラスターと第3クラスター間に有意差が見られた。この下位尺度の特徴からも高齢者大学への参加目的として「学ぶこと」だけではなく、「参加」してそこから対人関係を広げていくことを意識している高齢者の方が「孤独感及び不安感」が低く、「老いに対する態度」も肯定的であることが示されている。このことから、学習目的の在り方が主観的幸福感へ影響を及ぼしていることが示唆されている (Figure 4)。

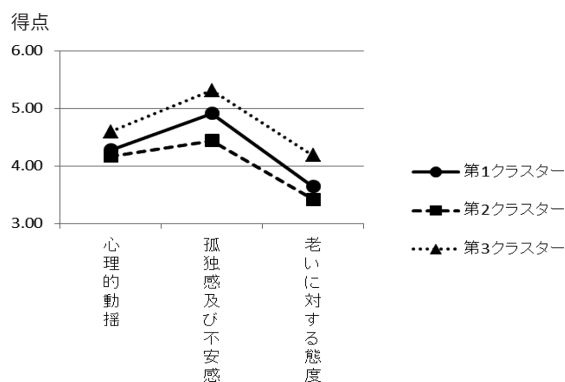


Figure 4 クラスター毎の下位尺度の平均値

以上のことから、単身や夫婦のみの小規模世帯での生活ながらも、積極的に高齢者大学などに参加し生涯学習に対して意欲を持つ高齢者は、下仲が定義するように「高齢者が自らの人生や生活に抱いている主観的な充足感」を持っていると考えられる。

自己効力感について

自己効力感については、今回、高齢者大学に自ら通う高齢者を対象にしていることもあり、特性的自己効力感尺度の得点は高い傾向が示され、学習意欲との間には関係は見いだせなかった。今後の課題として、健康状態には問題がないが積極的に学習活動を志向しない高齢者との比較やなどが必要になると考えられる。

まとめ

高齢者の高齢者大学への学習動機は、「学ぶこと」と「参加すること」（二次的利得）にまとめられる。この2つの動機がいずれも高い高齢者は「主観的幸福感」が高い傾向が示された。

しかし、自発的な学習行動が可能な高齢者が対象となっているためか、学習動機による「自己効力感」に差は認められなかった。

今回は高齢者大学に通う高齢者の属性などとの関連については深く言及することには至らなかったが、世帯規模の問題など現代社会における高齢者問題を垣間見る結果となった。今後の課題として単に生涯学習への参加という視点に限らず、高齢者の生活様式も視野に入れた研究アプローチが必要と考えられる。

引用文献

- 浅野志津子 (2006). 学習動機と学習の楽しさが生涯学習参加への積極性と持続性に及ぼす影響：放送大学学生の高齢者を中心に 発達心理学研究 第17巻, 第3号 pp.230-240.
- 畑野相子・筒井裕子 (2006). 認知症高齢者の自己効力感が高まる程の分析とその支援 人間看護学研究 4, pp.47-61.
- 堀薫夫 (1999). 教育老年学の構想 エイジングと生涯学習 学文社
- 堀薫夫・福島順 (2007). 高齢者の社会参加活動と生涯学習の関連に関する一考察 一大阪府老人大学修了者を事例として— 大阪教育大学紀要第IV部門 56,1, pp.101-112.
- 堀薫夫(編著) (2012). 教育老年学と高齢者学習 学文社
- 小坂信子 (2007). 在宅高齢者のQ.O.L. —PGCモラルスケール・フェイススケールを用いた調査から— 日本赤十字秋田短期大学紀要 12, pp.47-53.
- 小柳達也 (2012). 在宅高齢者における社会参加活動とセルフ・エフィカシーとの関連 社会事業研究 51, pp.122-127.
- Larson, R. (1978). Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, pp.109-125.
- Lawton, M. P. (1975). The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision. *Journal of Gerontology*, 30, pp.85-9.
- McClusky, H. Y. (1971). Education (Report for 1971 White House Conference on Aging). *U.S. Government Printing Office*.
- 百瀬ちどり・村山くみ (2013). 地域在住老年期にある人の主観的幸福感と影響要因：シニア大学受講者の生活満足度と身体的・社会的・対人交流の側面からの検討 松本短期大学研究紀要 (22), pp.93-102.
- 内閣府 (2017). 平成29年度版高齢社会白書 内閣府
- 成田健一 下仲順子 中里克治 河合千恵子 佐藤眞一 長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討 —生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究 43, pp.306-314.
- 小田利勝 (1993). サクセスフル・エイジングに関する概念的考察と研究課題 徳島大学社会科学第6号, pp.127-139.
- Peterson, D. A. (1976). Educational Gerontology: The State of the Art. *Educational Gerontology* 1 (1), pp.61-73.
- 瀬沼克彰 (2010). 高齢者の生涯学習と地域活動 学文社
- 下中順子 (1997). 現代心理学シリーズ 14 老年心理学 第13章 高齢者の主観的幸福感と社会参加 培風館
- 竹内香織・磯和勅子・福井享子 (2011). 地域高齢者における主観的幸福感に関連する社会活動要因 三重看護学誌 13, pp.23-30.

Study on elderly people's learning motivation and subjective well-being. Relationship between motivation to participate in senior citizen college and subjective well-being.

Ikko TAKAHASHI (*School of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University*)

In this study, I investigated into the elderly people's learning motivation, and subjective well-being and self-efficacy. Subjects are 109 elderly people (average age: 68.03) who are learning at the senior citizen college. I extracted the cluster from the data of the learning motivation, and examined subjective well-being, self-efficacy on this cluster. As a result, three clusters were extracted. The 1st cluster had the trait that they expect the secondary profit from participating. The 2nd cluster has the trait which does not expect "to participate." The 3rd cluster had the feature that the all are high. The score of the PGC morals scale was high in order of the clusters 3-1-2. There was a significant difference as a result of ANOVA. The significant difference did not appear in the self-efficacy score. Accordingly, it was shown that the elderly people's learning motivation had affected subjective well-being.

Key words: the elderly people, learning motivation, subjective well-being, self-efficacy

—2017. 12.9.受稿, 2018.1.26受理—